

カルーア ハッピーライフ！4——サンプル——

商業B]カルーアミルクの男体妊娠パロディです。

オムツ・尿パッド・排便助・お漏らし・勃起練習・射精練習・素股・手コキ・乳首・撮影等

「諒くん、うんちが出ていないな」

朝食後の篠崎の言葉。思わず目を逸らす。

「諒くん。大事なお話だよ」

「……はぐ」

悪阻が治まり約一週間。この間一度も排便ができていない。確かに食べる量は普通の人と比べたらまだ少ないけれど、さすがに一週間も経つとお腹の苦しさは自覚していた。

でも、オムツなのだ。オムツと尿パッドがあるせいで出せないのだ。

「諒くん、お腹が苦しいだろう。妊娠中は便秘になりやすいようだけれど、このままだと病院だよ」「やっー！」

便秘で病院、というのは避けたい。けれど、オムツを止めたいとも言えなかった。

(オムツ替え……気持ちいいんだよな……)

それだけじゃない。オムツ替えの羞恥が気持ちいいだけでなく、篠崎は尿の量や濃さ、回数、出血の有無まで確認してくれているのだ。その管理される感覚が気持ち良くて止められそうにない。

「諒くん……だがうんちを出さないよ」

「……出ないんです」

最初のうちは便意があった。けれど恥ずかしくて我慢しているうちに排便欲求さえなくなってしまったのだ。

(だって……)

尿は篠崎がパッドやオムツで管理してくれている。だから尿はそのまま出していい。と言っても勝手に出すなんてできなくて、排尿の度に篠崎に甘えて抱っこしてもらいながら出すのだけれど。

(それも好きなんだよなあ……)

どうやら妊娠をきっかけに趣向が変わってしまったらしい。今まで排泄に性感を見出すなんて想像もしていなかったのに、今ではすっかり排泄管理の虜になってしまっている。

(でもそれがダメなんだよなあ……)

つまり、尿はその場で出している。だからつまり、今の安西がトイレに行くことはそれだけで排便をしに行くと言っているようなものなのだ。それがどうにも恥ずかしくてできなかった。

「……水分が足りてないのかな」

出ない、という安西の言葉をそのまま受け取ってくれたらしい。篠崎は顎に手を当てて考えている。

「あの……」

最近、調理は一緒にすることが多い。一人でも大丈夫だと言って心配だからと言って篠崎が隣で作業してくれるのだ。過保護。でも嬉しい。

「僕……恥ずかしくて」

調理のメインは安西だ。けれど手伝ってくれていることを思うと篠崎が自分を責めてしまうかもしれない。となると、打ち明けるしかなかった。

「恥ずかしい？」

「その……する、のが」

「……ああ……そうか。俺はオムツにしてほしかったが……せつかく悪阻が終わったんだ。もう苦しいのは嫌だろう。トイレに行っておいで」

「……はい……」

一緒に来るというかもしれない——そう思ったけれど篠崎はソファに座ったままテレビのリモコンを手を取った。

「……あ……」

途端に感じた寂しさ。何をするにもずっと一緒に、心配だからと絶えず寄り添ってくれていたのに。

(……気を遣ってくれてるんだよね……)

きつと妊娠していなかったら気にせず、それこそ薬を使ってでもオムツにさせられていたと思う。

(最近……すごいし)

篠崎はすごい嗜虐性の持ち主だった。それに喜びを感じる安西も同類なのだけれど、なぜか妊娠が分かっただけからその趣向を曝してくれるようになったのだ。

ちらりと篠崎を見て、それから席を立つ。やはり一緒には来てくれないらしい。

(つて、来られても困るけど……)

恥ずかしいから出せない——そう言ったから篠崎はここに残ってくれているのだ。

篠崎はニュースを観始めている。

仕方なく一人でトイレに向かった。

「諒くん、うんちは出せたかな」

(どうしよう……)

せつかく篠崎が気を利かせてくれたというのに、何分粘っても排便できなかったのだ。

出ないだろうと思いつつ、いざ便座に座ってみれば便意はあった。もう長期の便秘になっていたので圧迫されているのだろう。なに出せなかったのだ。

「諒？」

「あ……え、と……」

どうしよう。嘘は吐きたくないけれど——。

「諒くん、うんち、出せなかったのかな」

「あ……」

恥ずかしい。出なかったのか、じゃなくて出せなかったのか。

(バレてる……)

寂しかったのだ。寂しくて、仕方なく一人でトイレに行った。ちゃんと自分でオムツを外して便座に座ったのだけれど一人ではどうにも排便ができなかった。

それどころか尿も出なかったのだ。最後の排尿からはもう数時間経っているというのに。

「……しのぎき……」

急に怖くなってしまった。だって一人で排尿すらできなくなってしまっていたなんて。

「諒くん、どうした」

篠崎に手を引かれ、向かい合った状態で篠崎の膝の上に座る。

「諒くん、お話して」

「ん……」

子供扱い。顎を撫でられながら口を開く。

「あの……僕、おしっこも出せなくて……」

「おしっこも??」

篠崎もやはり驚いていた。最後の排尿も当然篠崎の腕の中でしたし、パッドだって篠崎が替えてくれていたから時間が経っていることを分かっているのだ。

「はい……あ、でも出そう……」

「おしっこ?」

「ん……」

どうしてだろう。さっきは出なかったのに。こうして篠崎の腕の中にいると急に出したくなってしまうた。

「大丈夫、出してごらん。うんちも出せるかな」

「やあ……」

いやいや、と首を振りながら尿を出す。気持ちいい。ペニスの先の皮が膨らんで、それからペニスを包む尿パッドに尿が吸収されていく。

「あ、あ……」

「気持ち良さそうだ。抱っこでおしっこが癖になってしまったかな」

「あ……ごめ……」

「嬉しいよ。もう諒くんが俺の腕の中じゃないとおしっこもできないなんて」

「あ、あ……」

すごい。気持ちいい。性感とは違うのに、同じくらい気持ちいい。

「すごいな、まだ出てるのか」

「ん、出てるう……」

確かに長い。でもなんだか勢いがないような感じ。試しに「んっ」とお腹に力を入れてみるとそのときだけ「シャー！」と強く出たけれど、力を抜いたらまたしよろしよる漏れ出すだけに戻ってしまった。

「ああ、可愛いよ……」

オムツの越しにでも分かる硬いもの。篠崎が安西の排尿を見て興奮してくれている。

「あん……篠崎……おちんちん……」

「いやらしいな。おしっこを出しながら俺のペニスを意識してるのか」

「あっ」

ぐっと腰を押し付けられ、排尿が止まってしまふ。

「あ、ダメっ、おしっこ出ないっ」

「おしっこの穴が塞がってしまったかな」

篠崎は楽しそうに笑った。でも腕はがっしりと腰を抱えたまま離してはもらえない。

「やだぁ……おしっこ出したい……」

「でもこれ以上出したら尿パッドがいっぱいになってオムツに漏れてしまふよ」

「あ……」

それは恥ずかしい。でもそもそもオムツなのだからそうなってしまってもいいような気もする――。

「えっちな顔だ。思考が働いてないな」

「ん……」

「どうしてほしい？ 尿パッドからオムツに漏れるのを待ってみようか」

「や……大丈夫……漏れないからぁ……」

「どうして？」

「あっ」

腰を押し付けられ尿意が強まる。途中で止められてしまったせいで下腹部が苦しい。

「諒くん」

「んっ……勢いがいいから……」

「勢いがいい？」

「はい……しよろしよろって漏れてるみたい……」

「そうか。じゃあ確かめてみよう。お腹に力を入れておしっこを止めておきなさい」

「っ……」

命令口調に腰がぞくりと震える。

「諒くん、お返事は？」

「はい……」

きゅっとお腹に力を入れて排尿を止める。感覚がおかしいようなので止まっているかはよく分からないけれど。

「いいこだ」

篠崎に下ろされ、立ち上がったから抱き上げられる。向かった先はベッド。掛布団をどかさされて真ん中に寝かされる。

「本当に漏れないか確認しながらおしっこしような」

「んっ……」

まだ結局一度も勃起はできていない。でももしかしたら今日はできるかもしれない。だってこんなに興奮している。

「ズボンを脱がせるよ」

相変わらず家の中ではパジャマのまま。気分転換に外に出るときにしか私服は着ていない。緩いゴムのウエストのせいでズボンが簡単に脱がされ、それからオムツのテープが剥がされた。

「あ……や……」

この瞬間だけは何度経験しても慣れない。急に空気に触れたことで感じる一瞬の寒さとそれから解放感。一番は羞恥心だけだ。

「可愛い。そういや少しタマタマが小さくなったんじゃないか」

そう言いながら篠崎が掬うようにタマを持った。

「あつ、だめっ」

「ん？」

「出ちゃおう……」

我慢はもう限界だ。それなのにタマなんて持たれたら身体力が抜けて出てしまう。

「ああ、そうだった。すまない。つい可愛くて。おしっこ、出していいよ」

「え……」

でも、たくさん出てしまったら。漏れ出てしまったらどうするのだろう。

「大丈夫、オムツは開いただけだよ。ちゃんと敷いたままだから漏れても大丈夫。出してごらん」

「ん……」

見られながらの排尿はパッド越しでも恥ずかしい。でも気持ちいいから力を抜いた。

「あ……出てる……」

すごく気持ちがいい。うっとりとしてしまう。排尿の快感。これだけ気持ち良かったらトイレで出せないのも納得だった。

「……音がしないな」

「んっ……」

力を入れると、やはりその瞬間だけ勢いよく排尿された。

「ああ、聞こえたよ。ありがとう。ちゃんと出てるな」

「はいっ、あつ……」

いいこ、と言って篠崎が尿パッドにキスを落とした。今必死に尿を吸収している尿パッドに。

「やだあ……キスしちゃ……」

「どうして？ 頑張ってるからキスしたくなったんだよ」

それならせめて排尿を終えて新しいパッドに交換してからのがいい。今まさに尿を吸っているパッドではなくて。

「や、汚いですっ」

尿は会話をしていてもそのまま漏れ出ていた。安西の意思とは無関係のように続く排尿。

「汚くないよ。パッドをしているし、諒くんのおしっこだって前に舐めただろう」

「っ！ バカっ！」

そのときはペニスごと舐められたのだ。恥ずかしい。せっかく忘れていたのに思い出してしまった。

(すごく気持ち良かった……)

包皮輪に舌先を入れるようにほじられたのだ。それが言葉にならないほど興奮した。

「こら。諒くんはもう親なんだからそんな言葉を遣ってはいけないよ」

「あ……ごめんなさい……」

昂っていた気持ちが一瞬で萎える。だから続いていた排尿も止まってしまった。

「きちんとごめんなさいができるいいこだ」

「ん……」

篠崎の身体が伸びてきて、頬へのキス。唇にほしいのに最近篠崎はあまり唇へはキスをくれなくなってしまった。

「篠崎……」

「ん？」

どうして唇にはくれないの——そう訊きたいのに聞くのが怖い。

「……おしっこ、終わりました」

きつと怖くて止まったんじゃない。単純に終わったただけだ。タイミングよく。

「……漏れ出なかったな」

「ン……よかった……」

「そうかな？ 俺は見たかったな」

「……漏れるところ？」

「ああ。尿パッドだつてそれなりに吸収量はある。それを超えて、ぐちゃぐちゃになるまでおしっこし続けるところが見たいな」

~~~~~

一度抜かれた指がもう一度アナルに触れた。今度はさつきより大きい。

「あっ！」

「二本だよ。大丈夫、諒くんは二本まで受け入れられる」

「やあっ！」

お尻で指三本。むしろ篠崎のペニスを考えるところと太いものも大丈夫だけれどこんな風に言われると。

「言わないで……」

「うん？」

「恥ずかしい……えっちみたい……」

「諒くんのお尻はえっちだよ。柔らかくて、赤くて」

「やっ……」

「ほら、指も二本入った」

少しきつい。でも確かに入っている。

「うんちがなければ指も奥まで入るんだが……ほら、中で動いているのが分かるかな」

篠崎が指先をくりくりと動かした。つられて中が動く。指の動きに合わせて腸が揺れる。

「あっ、あっ！」

「気持ちいい？」

「んっ、んっ！ すごいつ、あっ！ 中がっ」

中が動いている。すごい。気持ちいい。

篠崎の枕を抱え込み、目を閉じてアナルの感覚に集中しながら匂いを嗅ぐ。

「うんちだよ。うんちが動いているんだ」

「っ！ やっ！」

普段とはちよつと違う動きだとは思っていたけれど、まさか指先で便を弄っていたなんて。

「可愛いな。うんちの動きで感じるなんて。うんちがなければもつと中まで指を入れられるんだが……だがほら、ちゃんと意識して。これだよ」

また指先が便を揺らす。汚いし恥ずかしいのに感じてしまう。

「あっ、あっ、ああっ」

「ほら。これだ。これを出すんだよ」

「ああっ！」

揺れる。便と腸が。いけないことをしているような気持ちがちがとんと興奮を高めていく。

(なのにつ……！)

勃起していたら射精できるのに。「うんちを揺らされて興奮しているのか」と言葉で責められながら射精したい。

「諒くん、感じているだけではないよ。可愛いが、今はうんちを出す練習だよ」

「あっ……」

「俺の指を抜いてごらん」

「え……？」

「ほら。力を入れて指を抜いてごらん」

「やっ……そんな……」

まだずつと篠崎の指を感じていたい。便を揺さぶられていたい。それに自分で指を出すなんて――。

「諒くん。病院に行つて『うんちが出ないので助けてください』って言うのかな」

「やっ！」

それは嫌だ。恥ずかしい。

「ならうんちを出せるようにならないと。諒くんも練習は好きだろう？ 勃起も射精も練習してできるようになったんだからうんちも頑張れば出せるはずだよ」

「んっ……」

顔がくしゃくしゃになるくらい力を入れて、お腹に力を込める。

「んんっ！」

「そう、上手だ。でもまだ指は抜けないぞ」

指に力を入れられているような感じはしない。なのに指が抜けない。腹筋が弱くなつてしまったのだろ

うか。

「しのぎき、出ないい……」

「大丈夫。もう一度してごらん」

「んっ」

もう一度、篠崎に言われた通りにお腹に力を込めた。

「んんんっ！」

「そう、上手だ……ああ、指が抜けるよ」

「んんっ！」

あと少し、と聞くと頑張ろうと思ってしまう。最後だ、という声に合わせて一際強くいきむと、アナルにはまっていた指がずると抜けた。

「あ……え、あっ！ やっ！ やああああ！」

指を出すのに思い切りいきんだことで篠崎の指にほぐされた便まで下りて来てしまったらしい。しかし長く指を啜っていたアナルは口を閉じてくれない。

(出ちゃうっ！)

「諒、出している」

冷静な声。もう止まらないところまで来てしまっているけれど、それでも止めたい。排便なんて見られたくない。

「やああ！ 見ないでえっ！」

ベッドも汚れてしまう。部屋も臭くなる。思うことは色々あってなんとかアナルを閉じようとするのにそれができない。

「大丈夫」

排便を促すように篠崎が腰を撫でる。

「やだあっ！ ああああああ！」

コロ、と乾いた小さな便が落ちた。

「あ……あ……あ……」

「大丈夫……」

篠崎の手は止まらない。

「全部出そうな」

~~~~~

哺乳瓶で興奮したなんて恥ずかしい。結局今言ってしまったているので同じだけれど。

「急いでベッドに戻ろう。あと、それだけ興奮しているならおちんちんも勃起できるかもしれない。少しおちんちんをマッサージしてみよう」

お願いしますと頭を下げた。

「絶景だな」

「やっ……」

膝裏を抱えさせられ、恥ずかしいところを全て篠崎に曝したまま。

「いやらしいところが多すぎてどこを弄ったらいいか悩むな」

「や……」

「まずはおちんちんのマッサージから始めてみようか」

「はい……」

足を下ろされ、それから篠崎がベッドに寝転んだ。背後から抱きしめられるようにしてペニスを揉まれる。

「あっ……」

「怖くない？」

「はい……気持ちいい……」

まだ勃起には至っていないけれど快感は得られている。

「そうか。じゃあ今日は限界まで揉んでみよう」

「え……」

まさか、このままずっとペニスを揉まれ続けるのだろうか。勃起できたらいいけれど、このまま勃起できないまま揉まれ続けたらつらい焦らしプレイになってしまう。

「やだぁ……」

「勃起できればすぐに抜いて出させてあげるよ」

「うう……」

分かっている。篠崎が射精について焦ってくれているのは気付いていた。だってもう十五週。そろそろ本当に射精しておかないと男性機能がストップしてしまう。

「諒くん……ちよつとつらいが頑張ろうな」

「……ご褒美くれますか」

「もちろん。何がほしい？」

なんでもいいよ、と言いながら篠崎が耳を食む。気持ちいい。ぞくぞくする。

「あっ……」

「ほら、何がほしいのか言わないと」

「や、あっ」

耳元で話すのは止めてほしい。腰が揺れる。

「諒くんは勃起のご褒美に何がほしいのかな」

「あ、あっ」

目を閉じて耳元とペニスの感覚に集中する。

(起ちそう……)

「諒」

「ああああっ！」

やわやわと揉まれるだけだった。ペニスをぎゅっと握られた。痛みはないけれど突然の強さに驚いた。

「……諒くん、ほら、早く言わないと」

「んっ、あっ」

篠崎の手の動きが変わった。柔らかいはずの。ペニスを優しく扱くような動きで揉んでいる。

「ああっ、あっ、気持ちいい……」

「ご褒美は何もいらぬのかな」

「あっ……す、素股っ、素股、してほしいっ」

前にももらった素股。篠崎の硬くて大きいペニスで、押し掛かるようにしてタマを潰してゴリゴリしてもらうのがすごく良かった。

「……せっかく男性機能を保とうとしているのに、諒くんの望みは壊すことなんだな」

ふっ、と篠崎が耳元で笑った。嘲るようなそれに熱が高まる。

「ああっ……ごめっ、ごめんさいっ」

せっかく篠崎が。ペニスの機能を残そうとしてくれてるのに。

「あっ、あっ、でもっ、でもおちんちんいらぬからあっ！」

篠崎に可愛がってもらうのは好き。大好き。けれどそれは排尿としてだけでいい。おちんちんがなくなっても、アナルがあればそれでいい。

「可愛い……じゃあご褒美だよ」

「えっ」

「おちんちん、勃起できてるよ」

（嘘……！）

まさか、と思つて下を見ると、確かに小さなそれは微かに上を向いていた。

「見えるか？」

「え？」

「小さいから、お腹が大きくなったら諒くんはもう自分のおちんちんも見えなくなってしまうな」

「っ……でも……」

否定はできなかった。

「でも、そしたら……そうなくても、篠崎がおしっこかお風呂、してくれるんでしょう」

「もちろんだよ。諒くんは今後もう二度とおちんちんには触らなくていいと思つているくらいだ」

「ひゃあっ……」

篠崎が身体を起こし、いつの間に出していたのかローションを陰部にぶちまけた。

「すまない、冷たかったか。だがもう我慢できない。タマタマを潰すよ」

「はいっ！ あっ」

二人ともきつと興奮の最高潮だ。哺乳瓶で可愛がられ、下痢をオマルに出させてもらった。四つん這いで産道とアナルを洗ってもらつて、勃起もできた。

「あああっ！ 痛いー！！」

痛い。タマが潰れる。でも気持ちいい。

「やっ！ もっと！ もっと痛くしてえ！」

痛いと言ってしまったせいで篠崎が掛ける体重を軽くしてしまった。でもそれじゃ足りない。タマの中の睾丸を潰して擦ってほしいのだ。

「ああああ！」

篠崎がズボズボと音がしそうなほどの勢いで腰を振る。気持ちいい。ペニスも気持ちいいけれど、やはり一番気持ちいいのは潰されたタマだった。

「あああっ！」

「諒、そうだ、リングを付けようか」

「えっ？ あっ、ああっ！」

会話をしながらでも篠崎は動き続ける。けれど急にビタリと動きを止めて、ベッドボードに手を伸ばした。

「これだよ。買っておいただ」

そう言ってみせられた透明の輪。見た目では樹脂のような感じだ。いやらしさは微塵も感じないな、と思っていると篠崎はしばらくそれを見つめた後で口を開いた。

「……あ。すまない、これはまたにしよう」

「えっ？」

「今更もう皮を剥けないだろう」

興奮しすぎて忘れていた、と篠崎が苦笑した。視線を追って下を見る。

「あ……そうでした……ごめんなさい」

安西のペニスは勃起してから剥くことはできない。勃起前なら剥けることは剥けるけれど、それでもペニスが膨張しすぎると締め付けが痛くなることがあるのでやはり包茎のままの方が気は楽だった。

「謝ることはない。俺も忘れていた。しばらく勃起の練習をして、スムーズに勃起ができるようになったら使おう」

唇にキスをもらって、それから篠崎はまたタマを潰してくれた。

「ああああっ……痛い……」

「痛いのがいいんだろう」

「んっ……タマタマ潰されるの好きっ」

でももうイってしまいそうだった。もっと楽しみたいのに。久しぶりなのに。

「ああっ、ああっ！」

ゴリ、ゴリ、トリズミカルな動きでタマの中が擦れていく。壊れそう。壊してほしい。

「諒っ……」

「あっ、しのっ、あっ、あっ」

まるで肉食獣のような目を見てしまうともうダメだ。心の中がぶわっと熱いもので満たされる感じがして、それが身体の中を通過して下から出てしまう。

「ああああああ！！！！」

びゅくびゅくとペニスが揺れる。けれど篠崎は動きを止めてはくれない。

「諒つ、悪い、もう少しっ」

5万1千文字です。次回の完結を目指し……てます……。